むすび

第2号

栃木県青年神職むすび会

発行所 栃木県青年神職むすび会事務所 栃木県神社庁内

発行人 吉田●健彦 印刷所 下野印刷株式会社

『団結』

＝青年の力を＝

吉田健彦

明治一〇〇年を迎えた一昨年来より激動の七〇年としばしばいわれ、つい最近では過激派学生による航空機乗取り事件も発生し、激しくゆれ動く今日、我々神道青年にあたえられた使命は大なるものがあるといはねばならない。

従って今日の神社教化活動の方法にしても、情報化時代の到来により、神社教学の根本的改革期に来ているのではなかろうか。例えば神社信仰の形態を見ましても、古代より豊葦原瑞穂国と呼ばれた如く、農業を中心としたものが数多く見受けられます。

しかし今日の日本では、科学の日進月歩の発達により、主食である米の大量収護を得る余り、食管法の赤字とかで、農業過保護の政策から脱皮を促す政策を政府が行なっています。ここで我々神社人が考慮しなければならぬことは、今日の神社信仰はすべて農耕行事に関連したものが大多分で、このように極度に農業国から工業国へと移行して行きますと、我々もまた今までの農業中心の信仰のあり方に対し、根本的かつ新たな考え方をしなければ、殊に農村の場合、今後氏子と氏神の関係はこれから益々疎遠になって行くのではなかろうか。このような時期が来つつあるということを認識せねばならぬと思われる。

氏子が中心として執り行う祭りの場における数々の神振行事にしても、農耕神事を題材にした芸能が数多く伝承されていますが、これが工業国へと急速に進んで行くにしたがって、農村の都市化現象により、本来の郷土芸能が若人から疎遠になって行くのが現状であります。

ましてやなんら魅力のない農村にくらべ、多くの都会の誘惑に若人の故郷脱出も手伝って、益々鎮守の杜がさびれて行く傾向は否められない現実であります。従って我々神道青年も、このように滅び行く祖先の残した文化遺産を後世の人々に伝える義務があると共に、これからの祭りの執行方法等は、今日の社会状勢を考慮に入れずして行なうことは非常に危険であると認識しなければならない。

ましてや戦後の教育改造その他によって、家族制度の崩壊等の改革がなされ、その結果日本民族の心のより所としての「敬神崇祖」の気持すら持たない。唯物的主義主張をなす人間が今日の社会に送り出されているのが現状であります。

したがって、このような物質文明の発展に伴って、人間の心の中に病める人間が育成されている現状の日本の姿に、今こそ教育のあり方に大きなメスを入れなければならない反省の時であると考えられます。

藤原弘達著「日本教育改造案」の中で「労働力の質を高めたものは何か、これは教育であるといわねばならない。（中略）教育された労働力というようなことになると、国家権力によって培養された労働力とか、社会体制によって飼育された労働力とかいうような表現をつかう人もあるかも知れないが、（中略）要するに日本人のもつ能力の開発が行なわれたということ、しかも教育を通じて行なわれたというところに、日本の経済力のみならず、民族的活力を認めざるを得ない」云々といっている如く、物質文化面のみの教育だけをほどこしていて、日本の正しい民族伝統の歴史教育がなされず、とりもなをさず日本経済の復興のみの願望が先に立ち、目先の事のみを余りにも追従した結果ではないのか。

要するに、精神文化面の教育がおろそかにされた結果、精神文化的不具者の日本人が今日数多く出来てしまったのである。まさしく「仏作って魂を入れず」の諺の如く、なんら精神的に満されない人間社会を悶々の中に過しているのが今日の日本人ではなかろうか。

日本は立派な国ではあるが、日本人は駄目であると欧米人が指摘するように、日本経済もここ数年来高度成長し、欧米諸国に肩を並べるまでに日本の経済力は成長していますが、しかし毎日々々のラジオ、テレビ、新聞等から報ぜられますことは、人間不信の暗いニュースのみが目に入ります。

何んの罪のない人間を、理由もなく平気で殺害する今日の若人の姿を思うにつけ、機械文明に同化された「心」を持たぬ人間育成を今日の教育が行なっているのではないのか。それは根本的には宗教家（思想界）の脱落もありましようが、教育こそが本当の日本民族の精神昂揚に大きな働きを持つもので、我々神道青年

も日本民族精神の昂揚を率先してやらねば明日の日本を担う我々としても、この運動を盛り上げる上に、一人一人がばらばらの活動ではなく、青年の力を結集してこそ社会改革がなされるのではないか。そうすることによってこれらの運動が結実する頃は、本当に心の底から喜びあえる日本の社会が生れるであろう。

なお、これらの神社界の行き方に非常に情熱を傾倒し、種々氏子からも感謝され、また我々むすび会員からも敬愛されていた荒川本一前会長が不慮の事故で逝ってしまわれた事は残念でなりません。後に残された会員の悲しみは更に深く、残された業績は大きなものがあった。荒川前会長が生前に親交の厚かった会員諸君が、想い出を新に、ここに追悼号を荒川本一命の霊前に供します。神去りましし荒川本一命天の原よりむすび会の守護神として会の発展をみまもって下さい。

所感

江部修一

創刊号「むすび」が発行されたのは昭和三十九年四月、あれから六年目、結成当時投稿された会員諸氏は、六つ年をとったことに気づいているだろうか。こんなことを考えながら創刊号を読み、一人苦笑する。

ぽつぽつと出初めた白毛を我が子から抜いてもらって、一本五円の抜賃を出す。一本の白毛を抜くのに三本の黒毛も一緒に抜かれた痛さで子供を叱る。親子ながらの風景ではあるが、何と皮肉なことであろう。今になってむすび会員でないことを自覚しながらも、ついつい集りに顔を出す。全頭白毛でないことに喜びを感じるが、定年三十五才の「青年神職むすび会員」とは相当に年令の差がついて来た。当時のイメージが忘れられないのであろうかと胸に秘める。

この六年間にめまぐるしい程に神社界も変化したが、当時の会員諸氏は今でもむすびの精神を忘れないでいてくれただろうか。若さの為に勝手なことを書き、勝手なことをいって、勝手にさわぐだけではつまらないことである。若人ならば若人らしく、新しき計画と正しき指導と実行と実現が重なればこれにこした事はない。

我々はよく「教化指導」という言葉を出すが、何となく寸づまりのように感じる。今度は「教化実行」とか「教化実現」と方向を進歩させた呼び方はないものかと考える。これが重要な目標になろう。

むすび会員も発足当時から見ると変って、若手神職が出て来ているが、若さの中で、新計画に新しい方法を考え出して事業を進めてゆくことは最も必要であって、すでに時代も変って来ている。

青年諸氏が時代に添った未開の分野を見いだすことは、仲々にむづかしいことであろうが、決して不可能ではないと思う。青年神職むすび会の発展のために、青年神職として「冒険と開拓の精神」は忘れてはならない言葉である。

自然の原野が田畠に変り、市や村が発展して大都会になり、月に人の行く時代になっても、宗教と哲学の区別の出来る時代に変っても、神職として神にお仕えする以上、祭れる神と祭る人とのあいだにつながる命の結びはより強く、よりかたくあらねばならないことである。

日本の国土に生まれ、日本人として老いも若きも信仰は共通でなければならないが、その信仰の中にも時代の流れに解決出来ない問題が神職に重積する。これらの解決については若き青年神職にとって、且つ重大な負担にして解決に努力を要する問題である。

古代における支那の哲学思想は二つの大きな流れによって左右され、今でもその精神が受けつがれているといわれるが、その一つは孔子を中心とした思想、もう一つは老子を中心とした思想である。支那哲学の思想は儒教または儒学と呼ばれ、孔子教ともいわれた。

この偉大な教えを生んだ孔子の人格は極めて円満であって、生涯、向上自修を怠らなかった賢哲の人であって、常に人の道を教えたといわれるが、その教えは実に自然の中に、古代支那民族の間に根を張ったのである。孔子の思想は現代の神社神道には取入れることは出来ないにしても、混迷せる現代世想と薄れゆく道徳廃頽の時代に、これを正道に導くものは神社神道と正しき教育であって、その学や教えについては神社神道化活動の実践上十分に参考にすることは一向に差支えないのである。

孔子の思想を裏付けている敬天や孝道の精神は、支那古代における国民性にもとづくものであろうが、天を畏れ天を敬う心持は必ずしも支那特有の思想だけでなく、日本人の神祭りの精神と現代日本人の家族制度崩壊からこれを守り、氏神を中心とした鎮守の森の精神に帰一することにもなると思うのである。

人の人たるべき道は道徳であり、公正で温味で慈味で、敬神生活の綱領にある「共在共栄」に適する道である。

孔子の所謂君子は公平で正直で寛宏で威厳があって文質共に程よきを得て敬天愛民の心を有した人物であったといわれるが、我国の本当の武士に入っていたともいわれている。

然して是非この教えを参考にすると共に、開拓精神を涵養して教化活動や実践活動に、力を効して努力せられるよう希望するものである。

青年神職に一言

古峯神社宮司　石原敬士

とかく私達は職務がら、終日屋内で過しがちであるが、これは長い月日の間には健康にも非常に悪影響を及ぼす。ましてや強力なエネルギーをもて余している我々青年神職等には、肉体的にも精神的にも耐えられない気持ちである。誠心誠意神に仕える者が、健康ならずしてどうして健全なる御奉仕が出来得るであろうか。……

この度青年神職むすび会においては、ゴルフの集いを設けて、日頃のエネルギーを発散し、有意義なる一日を楽しもうと言う。誠に素晴らしいアイデアと思います。澄み切った緑の絨毯、冬は漂渺とした沙漠を想わせる芝生の中で、新鮮な空気を胸一ぱいに吸って白球を追って歩く、歩く、また歩く。楽しくて楽しくていつしかゴルフにすっかり魅了されてしまった小生等、どなたにでもおすすめしたい気持です。

昨年の暮には都賀カントリークラブで、また去る二月二十七日には鹿沼カントリークラブにおいて第二回目のコンペを開き、いづれも会員多数の参加により和やかな一日を過しました。

今後、益々会員各位の健康維持とひいては神道高揚のためにも、健全なるスポーツを通して敬神和楽の念を深めて行くべきではなかろうか。

荒川君と語る

横瀬勝寿

荒川本一君の御冥福と併せて御遺族様の御清健を御祈り申し上げます。

小生は君と今迄本当の友人であったのか、それとも平凡な世人としての生活を持ち続けておったのか、未だにこの事が明らかにならず葛藤している有様です。

君はどうだろう。恐らく亡き君に語り問うても、その答は得られまい。

そんな心の中で、いろいろと君の過去や将来を思い廻らす時、一抹の淋しさと悲しさを感じます。特に君の将来は偉大なものがあったという事を思うと尚更の事です。

そんな個人の淋しさの中で、君の精神を世に永く残すと共に、将来の本県青年神職の心の糧となすべく、左に一種の提案を神職界になし、君の赤ら顔を思い浮かべたいと思う。

1　神職の使命は国家護持たらむ事。

2　将来の青少年（神職）育成に関する基本的方針の確立を急ぐ事。

3　県内神職の共済制度確立の検討。

吾々は今、幽明を分ちながら日常生活をしておりますが、今後の種々の問題点を君と共に考えて行きたいと思っております。そして前文に記したように「友人か否か」の点を時間と照して判断して行きたく考えております。

（昭和四十五年四月十日）

弔辞

昭和四十五年一月二十七日。

私はこの日を口惜く、悲しく、驚きの身で生涯忘れる事が出来ません。

荒川本一君、荒川君。

私は一昨日の朝、君の悲報に接し、身の震々と共に恐愕の心をどうする事も出来ぬまま、ただ愛する良き友を自分はどうして失なわねばならなかったのか、答も出ず五里霧中でした。

今母上様、奥様、幼く元気に飛びかう御子達と共に、君の神葬に御仕えしております中に、今は亡き君となった事が、私の身にひしひしと波寄せて来ております。

荒川君。口惜んだらよいのか、それとも激号したらよいのか。君の死という代償は余りにも大きく、私の身からはただただ涙がこぼれて参ります。誠に哀惜の極に甚えません。

今から十二年前、私は君と日光で知り合いました。君も自分もまだまだ学生さんの勾いの抜けきらない頃でしたが、大勢の友と共によく将来の神社の事や青年の事を語り合い、野球等をしている中に友情も深まるようになったある日、君が突然こんな事を言い出しました。「敗戦後のすさんだ社会の青年の礎の為に県内に青年神職の会を造ろうじゃないか」皆んなこの君の考えに賛同し、結成されたのが今日の「栃木県青年神職むすび会」でありました。

思えば八年前の事です。私が恐れながら会長を、君が副会長を、会は年一年と苦労はありましたが、君の高き知性と行動と人柄のもとに、会員を励まして成長して参りました。友垣は君の人格を尊敬しておりましたし、四十一年の春には衆望を背負って会長の重職につかれいよいよ会は発展し、会員同志の者達からは良き先輩と敬仰されると共に、去る十八日に至る在任四年二期の間に、青少年の育成を始めとして数知れぬ業績を残された事は驚きに価いするものでありますし、その足跡は将来神社界から高く評価される事と確信致しております。

私等にとってこうした欠けがいのない立派な青年を禍神はどうして黄泉国に年若く送ってしまうのだろうか。考えれば考える程暗のようです。

本当に短かい友綱であった事が、私等には悔まれてなりません。悲しみは深くつきぬ事ながら今この君の御霊前にむすび会々会一同に代って深く哀悼の意を表しつつ、君の御冥福を祈り告別の辞と致します。

昭和四十五年一月二十九日

栃木県青年神職むすび会

代表　横瀬勝寿

荒川先輩を偲ぶ

日光東照宮

稲葉久雄

荒川さんの急逝は、災難とはいいながら、余りにも突然のことであり、御不幸から日なお浅いいま、まとまった思いもうかばない。

私は荒川さんとは同じ栃木・吹上の郷に生れたが、先輩が九つ年上のこととて親しく接するようになったのは、昭和三十八年の春、私が東照宮に奉職してからである。

氏は失礼ながら短躯少壮であられたのにかかわらず、我々にはまねられないおおらかな風格をもち、通称本ちゃんとして親愛され、尊敬されていた。その後、昨年五月荒川さんが退職するまで、まる六年公私共々お世話になった。

写真をみていると、いろいろな思い出がつぎつぎにうかんでくるが、先輩ほど企画、判断、実行力をもち、若くして統率力に卓越した人物は少なかったろう。特に私が奉職した頃の活躍が印象に残る。ちょうど神青協が中心になって氏子青年部結成を推しすすめているころであったが、全国に先掛け「東照宮並木青年会」を設立し、盛んな活動をしていた。また県内の青年祖職の会である「栃木県青年神職むすび会」を横瀬勝寿会長のもとに設立、その中心となって活動した。父祖代々奉仕する栃木の住吉神社、八坂神社その他数多い奉仕神社の総代さんの連合会を中心として「下野総代睦会」を組織し、神社の信仰昂揚に力を注ぎ、斯界にその範を示したのもこの頃であった。

ある面では、激しい性格をもち、日光の当面していた種々の問題についても、いつも理論的に問題点をずばり指摘し、原因をさぐり、若手神職を引っぱり、勇敢に解決にのりだしたものである。その堂々たる気魄、力量は、神社でも重用され、町の人からの期待も多かったわけである。

先輩の功績は偲んでも限りないが、昨年二月、明治維新百年記念事業として、太平の八坂神社々殿を改修、また巨額の募金をつのり、社務所を建設し、竣工祭を盛大に執り行ない、私もこの祭りにご奉仕させていただいたが、先輩のよろこびは大変なものであった。今にして思えば、氏の短かい生涯の中で、最高の功績であり、神職の使命に最大のよろこびを感じた時期であったことと思う。

五月に東照宮在職十二年の職を退いて栃木にもどってからは、下野総代睦会を基本に、町村全体の組織の上に立った、神社本来の活動を展開、町の村のあらゆる会合、行事に神社の境内、新しい社務所を開放し、具体的には、神徳宣揚として例祭には氏子の献燈を手始めに、献穀祭、結婚式、神棚祭等つぎつぎと新しい仕事を企画、実行し、近く陛会役員と相図り幼稚園を設立経営すべく準備を着々推しすすめていたという。とても一神職では及ばないところを組織の力で大きな力を結集し、その活躍は正に超人的であった。

車と酒の悪循環と言おうか、はた禍津日のしわざとは言おうか、先輩は突如として逝いた。逝くにはあまりに若く、そして偉大すぎた。いくら惜しんでも惜しみきれない気持だけで、今は、これ以上まとまらない――。

故荒川先輩の魅力

日光東照宮
篠田英夫

一月二十八日未明、この現世に限りなき執着の情念を燃えたぎらせながら、その全てを一瞬の事故によって遮断されて、荒川さんは独り遠く幽界に旅立ってしまった。この非痛な死の報に接したとき、その唐突な出来事のあまり、呆然として信じられないことであった。

それは荒川さんの日常の行動の中に、何人よりも旺盛な生命力を印象付けられていたからであろうか。急逝、それが現実の出来事として認めざるを得ない、悲しくも口惜しき日、惜別の誠をこめた霹の玉串を手に手に、会葬者の列は蜿蜒と続く。すでに荒川さんとの間には、為す術もなき無限の壁によって、幽明相隔てられてしまっていた。

小生の悩裏には、当宮での過去十二年間の思い出が、次々とよみがえり、そして消えていった。

あのいやはての別れを告げた日から、早や一ヶ月が過ぎ去った。いまこうして共に過ごした十二年の歳月を回顧し、その人柄、魅力を偲ぶとき、直感的に二人の人物が連想される。その一人は、戦国乱世に勇名を轟かせた武将、織田信長であり、もう一人は、終戦後の混乱した角界にあって、土俵の鬼とうたわれた往年の名横綱若の花である。前者の中には、乱世を平定統一すべく、限り無き建設の意欲に燃え、その可能性を追求する力強い行動力であり、後者は、ただひたすら勝負に対する執念に燃え、人力の極限を追求するねばり強い根性である。この両者には、荒川さんの直接的魅力を感じさせられる。

些細なことにこだわらない度量の広さ、次々に起り来る諸問題に対する的確な判断力、そして変わりない若さであった。その若さとは、年令的、肉体的のみに限定された狭義のものではなく、強靱な精神力に裏付けされた、実にエネルギッシュなオスとしての行動力である。あるときは、多くの人達が手をこまぬいて後込みするような難事に真面しても、毅然とした態度でこれに取り組み、打開策を見い出すべく努力をおしまなかった。

小さなヒントから大きなアィディアを考えつき、しかもそれを単に夢に終らせず、大胆に実行に移しては、人をアッ！と驚かせる。独自の才能を持ち、且つ行動力に富んだ人物であった。この持って生れた不羈奔放な行動力は、奥様の大らかな内助の功と、氏子達の熱烈な声援とに扶けられて、一層活力を得、父親となってからも、それは些かも変ることがなかった。

いまから四年前、たしか当宮三百五十年祭の秋の頃であったかと思うが、鬼怒川での遊宴の夜、当宮を離れる決意の程を、そのときはじめて打ち明けられた。荒川さんは〝これは十年前、当宮に奉職する以前に決断すべきであった〟と言われた。それは、父祖代々継承して来た神主家、その後継者として氏神の社から遠く離れた地に生活の基盤を置くことが、如何に氏子達との距離を隔てるか、更には、当宮に対しても、氏子達に対しても責任ある行動を取ることが出来ない。と言う意味内容のものであったが、その後栃木に住居を移し、日光と栃木を日々往復するようになってからは、そのことを一層強く自覚されたのであろう。

神職こそ与えられた天職と確信し、神職を中執持と自覚し、過去の官制時代に芽ばえた、大社神職のサラリーマン化傾向、この病根の延長拡大されてきた神社界の現状を打開するために、積極的な活動を展開され、殊に氏子達との対話、奉仕の中に、神職としての自己の進むべき活路を見い出されて、実践的な啓蒙神道教化活動を押し進められていた。であるから、森の社の中のみで論う神道論は、最早や、その立場からすると、サラリーマン神職のお遊びとしてしか、受け取られていなかったのであろう。このことは、日常の会話の中で、そして当宮を退職し、荒川神主家十三代襲名の挨拶状にも、それが如実に記されていることからも推察される。

住吉、八坂、晃石神社以下十数社の宮司として、氏神、氏子へ直接的奉仕生活の喜びをかみしめられ、そして、来たるべき将来に繋がる神社運営の斬新なビジョンと、斯道進展の為の革新的抱負を持たれて、短日月の間に、盛り沢山の事業を次々と消化された。

その大前提とする目的に向って、建設的意欲に燃え、奔放不羈な行動力には、この宮司を得た氏子をはじめ、多くの人達が、その将来に対し、より多くの、より大きな期待を寄せていたのに……実に惜しい人物を失ってしまった。

しかし、荒川さんの指向した、神社運営に対する精神的指針・方向は、我々の胸の中に受けつがれようとしている。これは斯道の将来を荷い、現状打開の気概に燃える青年神職、とくに小規模神社を受け持つ神職子弟は、荒川さんの理念を受けついで、大きな実を結ぶ日が到来することを確信する。

謹献

故の住吉神社宮司またさきの日光東照宮権禰宜荒川本一の命を誅びて奉る挽歌並に反歌

そのかみの有馬の城の高処なる住吉の宮　ふり仰ぐ巨木の杜の空いまだ　春遠きいろ　見はるかす吹上のむら　構へよき家居ちりぼひ　山野みな静かなれども春の花いまだひらかずひそかなる村のおきふし　汝の命の父の命も　たらちねの慈しき母上もまた　この村の清き住居にその祖もまたその神も　いやちこの神のみまつり掌る　香ぐはしき家　代々つぎてこゝに久しく　み氏子と村人とむつび安らぎの日々のあけくれ　その家の愛子と生れ育ちては　日本の神々の道いや究め　ひたすらに汝命の選びたる父祖のみち　汝命の直き明るく正しき真心の若さ気勢と　ひたすらな行動力　会ふ人の心をひらき　集ふもの心躍りて　よき氏子よき友垣はそこかしこ　心の友と会ひ蔭となり日向となりて励し扶け　人の為世のためつくす　君の道こゝに開けたり神の道そこに輝く

かくてこそ　吹上の宮　富田の社仕奉る数多のみやしろ悉々に　神々はまさしく生きて　御氏子と地域の人に　神の御稜威あまねくひろく　大きなる力となりて　新しさ日本の神道　一筋の道にともれる神随浄き御灯　ほのぼのとゆらぐ思ひに　明日はまたいよゝ輝き　益々に照りまさむ日を皆人のこゝろひとつに禱ぎゐしに

ゆくなり天のさだめか　思はざるこの世のおきて　わが友は　最愛し妻と子供

と　老ひたまふ母のみことも　み氏子も
親しき友もはらからにさえ　別れをば遂
にえ言はず　なほわかく　幾春秋に富め
る身を　可惜くやしも時の間に　はげし
く著し神あがり　神成りたまへり
今更に天を仰ぎて　地に伏して　うつ
せみ遠き幽り世に　わが父よわが夫よ我
が子我が弟　わが宮の宮司よ　わが友と
声あげて高く呼べども　汝の命遂に応へ
ず　遂にかへらず　悲しみは深く極る
今日こゝに　みはふりの日に悲しみの
空もくもりて　天もまた悲しむならむ
さもあらば　われら友垣　み氏子　村人
のもろ〳〵群肝のひとつこゝろに　相よ
りて汝の命の遺したまへる　遠つ祖　神
々のみち　相共に扶けまつりて　ゆくす
ゑを護り奉らむ　いとけなく幼き児等は
手を執りて　導きゆかむ
汝の命　心安らに穏やかに　天がけり
国駈けり来寄りいまして　なつかしき神
社の辺に　したはしき家居のほとり　安
らかに鎮りたまひ　雨の日はその宮を守
りたまへや　風の日はめぐし妻子等　遠
長にそのゆくすゑを幸へたまへ
いざさらば　別れの言葉尽くさねど
安らぎたまへ　鎮りたまへ

反　歌

いちゞるく生きにし人はいちゞるく
果てたまひけりなほ若き日に
悲しみをたへかねて仰ぐ宮の空遅けれど
春はやがていたるべし

昭和四十五年一月三十日

栃木市吹上にて荒川本一命
埋葬祭弔詞にかへて
日光東照宮神主
矢島　清文

不慮の友をいたみて

杉　葉　人

故荒川本一君の追悼号が出ると言うので、その寄稿を依頼されては見たものの、彼の場合、追悼文を綴るには余りにも若く、悲しい。悲報を受け、葬儀にも参列させて頂いたが、未だ幼ない遺児の姿が胸懐の底にこびりついて消えないのである。

彼の生前が、人々の中で燦然と輝やけば輝く程、運命の配在が無惨に過ぎて、哀惜の情も極まるのである。私は、荒川本一君の霊に、讃詞に包んだ虚文を捧げることよりも、私の心の中に生き続けている荒川本一君を前に、酒盃を傾けながら語り合って見たいのである。

何故なら、彼と私との交友の大半は、酒を媒体として煮つめあっていたからである。談論し深更に及ぶことも間々あったが、酒盃に浮ぶ友情によって理解しあったものである。紅燈の下、肩を組みあいながら共通した未来像に酔い痴れる彼の姿は、好漢何するものぞの気概正に天を突くものがあった。

彼は一途な男であった。頑固に過ぎる程、自説を曲げることはなかった。彼の熱情的な思想は、あの朗々たる音声によって表現されると、それは一種芳術的な重みを持ち、独特な説得力となって人々を魅了してしまうのである。私なぞもその一人であるが、特に女性に対しては、強烈な印象を与えていたらしい。女性間における圧倒的な〝荒川信仰〟の秘訣も実はそこにあったのである。

今から約七、八年前のことであったろうか。ある行きつけの飲み屋が主催して、霧降高原で野外パーテーを催したことがあった。後になってわかったことであるが、発案者であり演出したのは彼であったのである。晩秋の夕暮、東照宮から持っていった紅白の幔幕を張りめぐらし、キャンプファイヤーの焚火をたき、新聞記者を初め、自称文化人なる人々を数十名も集めた時、一体どうなることかびっくりしたのであったが、当時、未だ三十そこそこの彼の行動力に、一同瞠目したものであった。ところが、彼の目的は以外なところにあったのである。彼の同僚のKなる方に見合いをさせる作為であったのである。彼の言うには、絶体に成功させなければならないが〝それには対手の女性にKを頼しく見せる必要があるから是非君も応援してくれ〟と言うのである。その時は私も大いに驚き呆れたものであったが、彼のひたむきな友情に敬服させられてしまった。ところがどうした手違いか、Kの対手なる女性は逐いに姿を見せず、あらうことか飲み屋の女将が、かねてからKさんに世話しようとしていた別の女性が来てしまったのである。彼のあわてようは見ていて気の毒な程、町の空に向ってあの大きな目玉をむき、長嘆息する彼の背中は、誠に印象的であった。

結果は、双方共不成功に終ったようであるが、同僚Kの為に、最後まで冷静に行動し、パーテーを盛況裡に収めた態度は立派であり、彼の面目躍如たるところであった。

先輩、同僚、後輩からの信頼と期待の大きさは、斯様な人の好さと、大胆なまでの実行力が基盤となっていたからではなかろうか。とも角、彼には人を集合させ指導することに、特技と言っても差支かえのないような手腕があった。何処となく人なつこい態度に加え、親しみ易い彼の風貌は天性のものとしても、彼の対話から受ける印象は、鋭くはあってもさわやかな安心感を抱かせる吸引力があった。

彼の独創的な論理は、時として無類の清新さとなって人の心に喰い込んでゆく。つまり学問的なもののみではなく、多分に社会を深く洞察した結果から抽出されたものに相違ない。したがって一見大らかに見える彼の感受性は、以外な程繊細で厳しいものであった。

彼の中の、神人としての荒川本一と、事業人としての荒川本一との調和に、彼は随分と苦労していたようであったが、終生までの間にそれ等をどう処理していったか、壮途半ばの他界は、改めて惜しまれるのである。

東照宮在職の数年間における彼の想い出は数限りなく多くあるが、対外的に特筆すべきは、市民との接触に積極的であったことと、驚く程精力的に働いたことであった。彼の前向きの姿勢は、彼自身は勿論のこと、東照宮の神徳高揚に大きな貢献をもたらしたことであろうと推察されるのである。これ等は、神人荒川本一君自体が、現代宗教の確立と言う大きな教義の展開に、絶体的な確信を持たなければ出来得ない事であろう。

彼は、あらゆる組織層に喰い入りながら、これも途半ばにして栃木市にあるご自分の社に帰ってしまった。ここで一旦挫折したかに見えた彼の社会活動は、栃木に帰って一層強固に発揚されていると聞いていたが……。

越材なるが故に、惜しみても余りある荒川本一君であった。だが、彼の精神は不滅である。何故なれば、現に私の心の中に彼は厳然と生きつづけているのであるから、生前彼との知己の関係にあった多数の人々の心の中で、彼は彼なりに、大きく深く成長してゆくに違いないことを信じているのである。

心からご冥福を祈る。

神主と自動車

永澤瑞碩

現在特に都市における公害は大きな問題とされている。中でも自動車の排気ガスによる公害は、都市にては等しい悩みとされている。幸いにして我々の住む町には、まだ排気ガスの害は目にみえて現れていない。しかし交通戦争とよばれる公害は、日常生活を常におびやかしている現実となってしまった。

考察してみると、こうした現象は日本の科学技術文化の天文学的発展のひずみとして現われたものである。現代は史上空前の技術革新の時代であり、神道人はかくの如き超高度な産業の発達を手ばなしで喜ぶことは出来ない。産業の発達、経済の高度成長による社会生活の急激な変化は「慣習の宗教」と名づけられる神社神道にとっては、神社の成立の基盤が大きくゆさぶられているわけであり、神社は高度成長の影響を受け、その公害の隠れた被害者の一つであるとも言い得ることであろう。

まだ公害問題があまりさわがれなかった頃、神社の戦後の復興が叫ばれていた十三年前の春、荒川さんと私は共に青雲の志を懐いて東照宮に奉仕することとなった。当時は自家用車は稀少なものであったが、これからの神主は自家用車を持って行動範囲を拡げ、広く氏子に接する必要があることなどを時々語り合つたものである。その後数名で運転免許証を取ろうと言うこととなり、共同でボンコツトラックを購入、境内で先輩の指導を受け、法規、構造の勉強をし、免許証を取得した。

当時は荒川さんと二人で寮生活を共にしていた。その頃自動車のセールスマンが、今考えればボンコツ寸前のダットサン乗用車を持って来た。値段は十五万円前後だったと記憶しているが、学校を出たての神主の卵に、十年前の十五万円の金はなく、安月給では月賦にしても大部分を月賦として支払わなければならないありさまであったが、そこが若さで、二人共同してその車を買ってしまった。勿論まだ東照宮の職員ばかりでなく、二社一寺の中でも自家用車を持っている人はないこととて、先輩からは昨日今日学校を終えたばかりの若造が自家用車を持って乗り廻すなど、もっての外で、自分の身立場を考えない暴挙であると言う批難の声がごうごうであった。

この我々の車は九九九と言うナンバーで角型、市中にも同型の車は少なかったこともあって、種々なエピソードを生み有名なものとなってしまった。ある時は道路からそれて田圃に入ってしまった。引き上げるのに数日を要したが、その間田圃の所有者から一坪程土地を借りて、自動車をそのまま置かせてもらったものである。ちやんと田圃を所有者にことわって借用しているのだからと言って、それを咎め立てられなかった良き時代であった。またある時は側溝に横転、下は水が流れているので、戦車のように上へドアを開き出て来たこともあった。まだ現在のように交通戦争の激しくなかった一昔前の話しである。

荒川さんはすでにその頃、栃木にある十数社の宮司であり、日光と栃木とを車で行き来し、神社経営の実践面で我々より広く深い知識を持っておられ、話しにも熱がこもったものであった。

神道は記紀に現わされる古い時代より、農耕儀礼を中心として発生し、農村の稲作りの暮しのなかから、日本人の生活の息吹としてつちかわれて来た。近頃農業の近代化科学化による米の豊作続きで減反が叫ばれ、農村の過疎現象に拍車をかけ、生活慣習の大きな変化を促し、神社神道の基盤が失われゆく危具の念を感じ、一方都市への集中化と、人々の意識の中には科学技術文化の発展にともない、天地の理法にそむくこと、宗教を軽んずることが一歩進んだ思想の如き錯覚に落ち入り、神道の場合は特に自然に対する畏敬の念は重要な要素の一つであるが、人類が月に足跡を刻み、宇宙を征服したと言う思いあがった考え方、さらに道義的な感覚が麻痺して来た諸現象等は総て神社神道の将来にとっては憂うべきことである。荒川さんは以上のような神社神道の置かれた現実の姿を自分の兼務神社の経営を通じ身を以って感じ、我々と常に話し合っていた。

従って、当むすび会の初代副会長、二代会長と務められた彼の功績を見かえせばわかるように、若い世代の神職に危機感を植え付け、国家管理時代における神職の頭の切り替えが必要であり、学校教育にしても、宗教情操教育乃ち神社に関する事項は戦前に比せばほとんどないのが現実の姿で、これからの神職達自身がそれぞれの置かれた立場において氏子と広く接し、教化の実をあげることが肝要であることを身を以って示していた。

彼が日光と栃木とを掛け持ちで務めていたのでは両方共中途半端になってしまう、観光的神社を選ぶより、父祖伝来の神社の興隆に尽すべきことの必要性を痛切に感じられたのは当然であったと言わなければならない。但し日光東照宮の損失は別として。

つまり、栃木における兼務神社十数社の氏子総代の人達を結集し下野氏子総代睦会を組織し、個々の神社単位では小規模で何を行うにも不便な為、総代さん達を一つのまとまった組織に成し、この会を基盤として教化の実を上げようとしたことも、彼の努力の現われであり、県下にも前例のない試みであった。また正月には氏子全戸を訪問、神棚祭を行なおうと計画し、今年は実行にうつしたが、戸数がかなり多いので、残念ながら全部訪問することが出来なかったとのことである。

こうした活動をするには、どうしても足となる自動車が必要となって来るのは地理的な条件を御存知の方であれば誰れしも感じられるところであろう。

近頃比較的若い神主さんは、それぞれ自動車を持って活動されているように見受けますが、神主は人の交通安全を祈願していながら、神主自身事故を起しては、その御利益の程を疑われてしまう訳けで、充分注意をはらうことが肝要である。

荒川さんも、前に記したエピソードの如き経験を通じ、おれは不死身であると笑い話しの中に語っていたが、その後は細心の注意をはらって運転し、もう無茶はやらないと時折述懐していたが、天のなせる業か、荒ぶる神のなせる業は如何ともなしがたく、自分自身で不死身と言っていた彼が事故にあうとは、何と皮肉な事であろうか。

最後に荒川さんの在天の霊安らかに、また御遺族の方々の御愁傷を御慰め申上げると共に、奥様が資格を取得せられ、荒川さんが育てた下野氏子総代睦会各位の御支援を得て、各神社がいよいよ栄え行かん事を祈念申し上げる次第であります。

ドクトリンの確立を

国学院大学講師
沼部春友

昨年暮から今春にかけて、言論・出版の自由をめぐって世論を涌かせたものに、藤原弘達氏の『創価学会を斬る』がある。本書の中で、藤原氏は、「戦後の日本社会は、巨大なる国家信仰体系とでもいえる天皇制社会を支えた神道的信条体系が、敗戦によってガラガラと崩壊したところに大きな特徴があるが、その精神的空白に対して、創価学会は独自の宗教理念を持ち込むことにより、空白によって生じた戦後社会の精神的渇望をそれなりにフルに利用し、民衆の心にくいいり、そのドクトリンによってあやつり、組織化していったわけで、ここに学会の一つの大きな特異性があるといえるだろう。」（一九頁）と創価学会が戦後盛んになった原因を述べながらも、「ともかく、このようなマス・ムーブメント、自己顕示型、誇大広告型の大衆運動を強引に進めながら、『王仏冥合』などというかなりいいかげんなご都合主義的宗教哲学をふりまわし、国民大衆を愚弄しているということは、宗教的にみて、まさにこれほど堕落した形態は、古今東西の歴史にみることができないといっても過言ではないかもしれない。」（二七頁）と批判している。

ここで我が神社神道について振り返ってみなければならない。戦前の国家神道は、所謂「神道指令」によって終止符を打ったが、神社神道がなくなったわけではなく、一宗教として存続した。しかし未曽有の敗戦にあったのであるから、当時にあって、宗教としての神社神道の信仰体系を確立するのには、あまりにもむずかしかったであろう。

昨年の十二月に開催された、日本文化研究所の現代神道研究会では、「神道における安心立命の問題」がとりあげられた。研究会の内容は、同「研究所報」三十六号に掲載されているが、筆者はこの所報のまとめ役を担当した。

そこで、過日、これを御覧になられた、県内のある宮司より、お手紙を頂戴した。その中で同宮司は、「私が此処数年悩みつづけて来たのは、神霊問題をどう論証するかと云ふことであり、現在のところ、とに角、一応過去の因襲惰性で、自分を胡麻化して居るにすぎない、と云った方が適当でせう。」と述べておられる。私は現在神道人が考えなければならない大切な問題を、正直に御指摘下さったと思って、このお手紙を拝見した。

神社神道が過去の因襲や惰性によって生きている傾向の強いことは否定できないし、神観・人間観・生死観・世界観など、神道におけるドクトリンの確立も未だなされているとはいえない。

想えば、敗戦後二十五年の歳月が流れ去ろうとしている。日本国民がいつまでも新興宗教のドクトリンに振り回されているようなことがあってはならない。

神社本庁で推進している国民精神昂揚運動も結構であるが、同時に神社神道のドクトリンの確立を計ることも急務ではないだろうか。そのためには、まず生きた信仰体験者である神職の一人一人が意見を発表しあい、研究者との討議を積み重ねていかねばならないであろう。

テレビと情緒

人見昇三

近年、科学・文化の発達に伴ない、世の中もめまぐるしく変わりつつあります。もっとも以前は、十年一と昔等と言われていたようですが、今日では、五年とは言わず、二、三年を以前の十年にも匹敵するような時代の推移と言えましょう。

こうした世の中にあって生活を共にしている我々は、科学・文化の恩恵にあずかり、一と昔前までとは比べ物にならない程の豊かな生活が営なまれております。中でも我々の日常生活に、一番科学の恩恵を受けたものにテレビがあげられましょう。テレビはもうすっかり生活の中に密着し、テレビの無い生活は考えられない程の世の中です。最低生活を営む上でも欠かせない条件の一つとなった事でしょう。

テレビは、すっかり我々の生活様式を変えてしまいました。以前は、一家団らんとか、年々の行事とかが楽しみの一つであったものが、今日ではテレビに一日中見入り、家族の話し合いや、年々の行事に加わる事を好まないような誠に「情緒」に欠ける世の中になったものだと思います。

私は、テレビが有害だと言っているのではありません。逆にテレビによって知識を豊かにしている場合の方が多いでありましょうが、より積極的な話し合いや年々の行事とかをもっと大切にしてもらいたいと言う事です。

年々の行事と言ったものには、数多くのものがあります。正月に始まり、大みそかに至るまでの間の行事には、たしかに無駄だと思われるものもないではありません。しかしそれら全てが無駄だ、めんどうだ、と言ってしまっては、味気のない世の中になってしまわないでしょうか。風情のない殺風景な、目の前の出来事だけを追い、それで満足しているようでは……。もう少し、心にゆとりのある心豊かな生活をしたいものです。

一例をあげるならば、七月七日の七夕祭。私達子供の頃は、盛んに行なわれておりましたが、今日では、幼稚園・保育所等の教材に使われる程度で、一般家庭では余り見られず、またたまたま見うけられると思えば、客よせのために利用されたものだったりいたします。もう少し子供達に夢を与えるような行事を積極的にやってもよいのではないでしょうか。

テレビを見て、知識を豊かにする事は必要です。しかし、心ゆたかな、希望があり夢があり風情ある生活をしたいものです。テレビのための無能な人生だけはやめたいものです。

栃木県青年神職むすび会々則

第一章

第一条　（名称）本会は栃木県青年神職むすび会という。

第二条　（事務所）本会は事務所を栃木県神社庁内に置く。

第三条（目的）本会は神社神道の興隆に基き、自己の研鑽と会員相互の親睦を図り、且つ県神社庁の事業に協力することを目的とする。

第四条（事業）本会は前条の目的を達成するために左の事業を行う。

1 研究会、講習会、その他文化的諸行事の開催

2 県神社庁諸行事に対する協力

3 リクレーション

4 その他本会の目的達成のため必要なる事項

第二章

第五条（会員）本会は本会の趣旨に賛同する栃木県青年神職をもつて会員とする。

第六条（役員の名称・任期）本会に左の役員を置く。役員の任期は各二ヶ年とし、三十五才以下の会員を充てる。但し再任を妨げない。

会長　一名
副会長　二名
幹事　若干名
会計監査　二名
庶務会計　一名

第七条（役員の任務）役員の任務は次の通りとする。

会長は本会を代表し、会務を総括する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは之を代理する。

幹事は会長・副会長とともに役員会を構成し、会務を執行する。

会計監査は会計を監査し会計事務を円滑ならしむる。

庶務会計は事務を分掌し、会計事務を行う。

第八条（役員の選出）役員は会員の互選により選出する。但し幹事は神社庁支部区分より一名選出する。

第九条（相談役）本会に相談役を置くことが出来る。相談役は役員会の推薦により会長が委嘱し、会の運営上の相談に応ずる。

第三章　会議

第十条（会の区分）本会の会議は左の区分によつて開催する。

会議は会長が召集する。

総会　年一回
臨時総会　必要に応じ開催
役員会　必要に応じ開催

第十一条（総会）総会に附議すべき事項は左の通りである。

1 予算決算の審議承認

2 役員の選出・改選

3 次年度事業計画並運動方針

4 その他会の運営に必要なる事項

第十二条（役員会）役員会の任務は次の通りである。

1 総会に提出する議案の作製・審議

2 会務の遂行

3 急を要し総会に諮る余裕のない事項

4 その他

第十三条（決議）総会は会員過半数の出席者を以て成立し、議決は出席者の過半数を以て決定する。

第四章　会計

第十四条（会計）本会の会計収入は会費・寄附金・事業収益金その他をもつて充てる。会費は年額一、〇〇〇円とし、二期に分納することが出来る。

第十五条（会計期）本会の会計年度は三月一日に始り翌年二月末日に終る。

附則

本会則は昭和三十八年三月一日より施行する。

本会則は昭和四十一年六月十二日改正

会員名簿

（五十音順）

青山　隆生　東照宮
安藤谷正彦　日本文化研究所
阿部　憶　東照宮
石原　敬士　古峯神社（幹事）
稲葉　三郎　護国神社
稲葉　久雄　東照宮（会計監査）
宇賀神亮二　大田原神社
宇仁　繁儀　東照宮
江部　修一　神社庁（事務局）
岡田　靖　日光二荒山神社
大金　幸男　東照宮
大塚　仁　日光二荒山神社
小野　暐　〃
小野寺建富　日光鹿島神社
金子　宏一　神社庁（事務局）
日下部恵也　織姫神社（幹事）
黒川　正邦　宇都宮二荒山神社（庶務会計）
黒崎　健二　八雲神社
小島　重大　東照宮
小島　隆督　八幡宮（幹事）
小林　一成　太平山神社（副会長）
小林　邦満　星宮神社（幹事）
小垣　一　星宮神社
斎藤　兵衛　唐沢山神社
桜木　宏紀　八雲神社
提箸　克之　日光二荒山神社（幹事）
佐藤　孝　宇都宮二荒山神社（幹事）
佐野　正行　唐沢山神社（幹事）
佐藤　信光　東照宮
篠田　英夫　〃
白旗　宏喜　宇都宮二荒山神社
鈴木　隆俊　東照宮
田口　静男　古峯神社（幹事）
田中　清　滝尾神社（会計監査）
永沢　瑞碩　東照宮（幹事）
長島　和男　大原神社
新村　貢一　星宮神社
沼部　春友　国大講師
野沢　幸宝　高靈神社
野沢　矢嗣　日光二荒山神社
人見　昇三　温泉神社（副会長）
平田　紀之　東照宮
藤岡　重孝　〃（推選幹事）
星野　至任　乃木神社
松田　一郎　日光二荒山神社（推選幹事）
宮原　功　三柱神社
矢野　忠弘　日光二荒山神社（推選幹事）
山杉　馨　八坂神社
湯沢　栄一　東照宮
横瀬　勝寿　賀蘇山神社（幹事）
横山　水木　〃
吉田　健彦　日光二荒山神社（会長）
吉田　豊彦　〃
若井田　正導　三篠神社
　　秀　大宮神社

◇新人会員並びに異動等がございましたら宇都宮二荒山神社・黒川まで御通知下さい。

社是

我らは誠意を以つて事に当り、創意と工夫に依り、製品の開発に努力し、社業の利益と繁栄を図ると共に、生活の向上と公徳心を高め、地域社会に奉仕しよう。

社訓

骨身を惜しむべからず。

民藝

株式会社　郷土民芸研究所
代表取締役　中村北翠
茨城県水戸市中丸町2052（〒311-41）
電話　水戸（0292）51局5621（代）

所感

国学院大学日本文化研究所
研究員　安蘇谷正彦

今年度の、国学院大学神道学科の新入生は、百余名の多きを数えている。数からいえば一応歓迎出来る。然し喜こんでばかりおられない。神道学科学生の最低合格点が、他の学科や学部に比らべてかなり低いことは、学内では良く知られている。国学院大学が、全国の大学番付で一流に入らないことも事実である。

つまり神道学科の学生の質は、日本の諸大学中二、三流の学生をかかえる国学院の中でも、最低の成績の学生の集りなのである。そういう筆者も神道学科を出た一人であり、新年度を迎えるたびに情けない思いをする。

日本の歴史を省みても、神職が常に知識階級を指導していたとはいえない。むしろそのような例は稀といって良い。日本思想史の中でも、一支流たるに過ぎない国学の代表者、宣長、篤胤が神職者でなかったことを考えれば、いかに神職者が学問的にぱっとしなかったかがわかる。だからといって、神職者はいくら努力しても無だでは誠に困る。神道界のみならず、日本のためにも困るのである。

日本が生れて以来、米の豊作を祈らない時代はなかった。にもかかわらず、現代は米の豊穣が政治家の頭を悩ますという時代なのである。このこと一つを取りあげただけで、日本が全く変った状況に遭遇しつつあると考えざるを得ない。

私は、日本の農業人口が三分の二をしめる時代は、神職者は重祭祀型の考えでよかったと思う。その意味では神道は、伝統の保持にいかなる疑いをかけなくてもよかったとも換言できる。私はそういう状況であるならば、神職はまじめで、おとなしく、何事も旧来のしきたりを守る型（タイプ）の人間で充分に奉仕出来たと思われる。しかし今は異なる。単なるまじめ人間では二進も三進も行かないのである。

多くの人々によって、現代は価値の混沌の時代とか、無価値の時代とかいわれる。要するに正邪・善悪の基準が一定しない時代と思われる。科学技術の進展が人類にバラ色の夢を抱かせるという認識が少しも疑われなかった近代と今は異なる。そういう変革の時代だとまず認識する必要があろう。

すくなくとも、現代を自分はどう理解するかの問を、積極的にもってもらいたい。大きな問題であるが、こう自らに問いかけることによって、現代において「神とは何か」「祭りとは何か」が主体的に関わってくると思う。

坊主の葬儀屋と同様に神主の結婚式屋と悪口いわれたり、大きな神社の神職のサラリーマン化が歎かれている現状において、一つの光明を見いだす道は、まさに神職者が、㈠現代と㈡神道とを主体的に問い、解答をみつける試みをすることであろう。

栃木県には、幸いにして、そういう努力をしている神職者がいる。東照宮の禰宜池上宗義氏の書いた「山神主」は一つの手本になろう。全国一万八千人の神職が、価値の混乱の時代に神職という価値の選択をしたことを強く認識して、現代において神道的に生きることの意味を積極的に問う努力をすれば、たとえそれが貧しい才能の人間からでも、何にか新しい力を生むと信じたいし、信じている。

宮内庁
神社本庁　御用達
森装束店
森近太郎
東京都新宿区西新宿四丁目七番二十二号
電話（三七六）四六三一

編集後記

昭和三十九年四月に創刊号が出て以来六年ぶりに二号がようやく出せることになりました。忙しい最中御寄稿下された諸先輩方にお礼申し上げます。

※日本は今大きな曲り角に立たされております。先日の日航機のっとりのような無暴な行為が平然となされる世となってしまったのです。犯人はいずれも戦後の教育を受けた我々と同じ年代の者たちでした。学校教育、家庭教育の重大さを再認識させられました。

※昔海軍では

一、至誠にもとるなかりしか

一、言行に恥ずるなかりしか

一、気力に欠くるなかりしか

一、努力にうらみなかりしか

一、不精にわたるなかりしか

という五省を就寝前に唱和して、今日一日の自分を省みたそうです。しかしこういったいいものも軍国主義の名の下に否定されてしまったのです。教育勅語にしてもそうです。

※年老いた人が昔のことを話されると、またかと感じられてしまいます。しかし若者が同じことを言っても耳新しく聞えるものです。我等若者たちこそ昔のよきものを再認識しなければならないのです。「温古知新」この言葉をもう一度考えてみたいものです。（黒川正邦）

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽